

第1章 仕事は人生最大の舞台

仕事は人生最大の舞台

仕事は、自分の人生における最大の舞台です。少なくとも私はそう思っています。しかも、そこで何をどう表現するかは自分に委ねられている。舞台狭しと駆け回るもよし、奇抜な衣装に身を包んで踊るもよし、大声で歌うのもまたよし。自分に合ったスタイルで遠慮なく自己表現してください。それがビジネスマンに与えられた最高の権利なのです。

「だいじょうぶ！必ず流れは変わる」

最初に樋口さんと私が出会ったのは1990年代初めのニュービジネス協議会のパーティーでした。協議会ではユニークな企画を表彰してビジネスの活性化を図るイベントを開催しており、当時私が外食ビジネスで立てた事業企画がその表彰対象となり、協議会の会長だった樋口さんから表彰状を受け取ったのです。そして、その後のパーティーでご挨拶をしてほんの数分だけ話をしました。

当時の私にとって雲の上の人だった樋口さんでしたが、初対面なのにとっても気さくにお声をかけて頂き、感動したのを今でもはっきりと覚えています。その瞬間から、樋口さんの大ファンになりました。私が30代後半の頃のことです。

そして、後になります。私が樋口さんについて執筆した書籍をご覧になられて、いきなりご本人からお礼の電話を頂きました。これにはまたびっくり致しました。と同時に、さらに樋口さんの大ファンになったことはご想像の通りです。

今思い返すと、もしかすると人たらしともいうべき樋口さんの樋口マジックにかかったのかもしれない。

それを機に、様々な有り難いご縁を頂き、私が代表となつてつくった樋口塾ともいうべき産官学の勉強会「廣志会」でご指導して頂くなど、直接、樋口さんの警咳に接したのは人生の幸運でした。

樋口さんは仕事について、「自分に合ったスタイルで自己表現すること」すなわち、自分のスタイルで仕事をし、社会や地域に貢献、還元することが大切で、人生は仕事を通じて行う「修行の場」ともよく言っておられました。

私自身は経営コンサルタントで、さらに作家として単著でも二〇冊以上の本を書いてき

ました。若い頃は「仕事が人生の最大の舞台である」と言われても、そうだとはいないながら、そういう高い意識の実践ではなく、目の前の仕事や、やらなければならないことに追われて必死に頑張っているというような状態でした。

しかし、今振り返ると、樋口さんが人生を舞台と言い、「自分のスタイルで存分に舞台を駆け回りなさい」と背中を押してくれたことが、とても有り難く、この言葉を読むたびにそうあらねばと、また、そう意識して頑張らねばと思います。

若い読者の皆様、あるいは企業の中堅でがんばっている読者の皆様に最初にこの言葉をお贈りして、人生の舞台で思う存分に力を発揮していただきたいと願ってやみません。

「おかげさま」の感謝の心で

いつも思うのですが、私の能力や努力なんて、たかが知れています。私が小ささまざまな「危機」を突破して今日あるのを一言でいうならば「おかげさま」という言葉以外にはありません。数え切れないほどの「おかげさま」を多くの人にいただき、助けられながら、どうにかこうにかのりきってきたというのが現実です。「挑めばチャンス逃げればピンチ」

松下幸之助氏は「感謝の心は、心的法則の柱である」と語っており、私はその内容を「感謝があれば必ず成功する―松下幸之助に学ぶ感謝論」（総合法令出版刊）という本にまとめました。

松下幸之助氏と交友のあった樋口廣太郎さんもまた、感謝の心が大切だとあらゆる場面と言っているぐらい折に触れ語っておられました。講演などでも樋口さんから「感謝」と

という言葉を聞かれた人は多いのではないのでしょうか。

松下幸之助と樋口廣太郎という二人の人生と経営の先達がそろって「感謝が重要」と主張しているところを見ても、いかに感謝の気持ちが大切かということを理解して頂けると思えます。

「アサヒビールの奇跡の復活」という大きな偉業を成し遂げても決して「自分の力でやった」「俺の実力だ」と自慢して言いふらすのではなく、一緒にがんばってくれたスタッフのおかげだと一歩下がって心から感謝する。そういう姿勢があったからこそ、どん底にいた当時のアサヒビールの社員のみなさんも、樋口さんについて行こう、と考えられたのではないのでしょうか。

あらゆる成功は一人だけの力で成し遂げられるものではありません。樋口さんはそれを知っていたからこそ、奢らず、高ぶらず、感謝され続けられたのだと思います。

また、感謝の心は人を永遠に幸福にさせてくれる不思議な力があるとも松下幸之助は述べています。お金で買った幸福感は一過性のもものだけけれど、感謝の気持ちがあれば、幸福感は無限です。天気が良ければお天道様に感謝できるし、普通の一日でも健康で有り難い